



木々に囲まれ静かに佇む千鳥ヶ淵戦没者墓苑

終戦80年、戦没者への想い新たに 若い世代への継承を



終戦80年特集号

令和7年8月1日

公益財団法人 千鳥ヶ淵
戦没者墓苑奉仕会
〒102-0075 千代田区三番町2
電話 03 (3261) 6700
FAX 03 (3261) 6712



http://www.boen.or.jp

郵便振替口座 00140-2-42556

編集人 中村 勤
発行人 杉本 順則



墓苑の花「紫蘭」

花言葉

「あなたを忘れない」



創建当時の墓苑

先の大戦においては、国のため二百四十万の方が海外において亡くなられた。昭和27年からのこのご遺骨の収容が開始されたが、氏名不詳のため遺族にお渡しできないご遺骨を奉安するため、千鳥ヶ淵戦没者墓苑は昭和34年3月に創建され、その当時奉安されたご遺骨は八万七千柱余であった。爾来今日まで、毎年春には厚生労働省による「千鳥ヶ淵戦没者墓苑拜礼式」が、秋には千鳥ヶ淵戦没者奉仕会により「秋季慰霊祭」が行われ、また年間を通して、国内外から多くの参拝者が訪れている。拜礼式では毎年、海外（硫黄島含む）からご帰還のお名前が判らない方のご遺骨が奉安され、三十七万八千柱（令和7年5月末現在）となっている。

終戦80年の節目に当たり、尊い命を捧げられた英霊に対し御霊安かれと追悼と顕彰の誠を捧げるとともに、悲惨を極めた先の大戦を風化させることなく後世に未永く語り継いでいくことを改めて誓うものである。また、関係各位の努力により創建当初からの設計思想である簡素、清浄、荘厳な墓苑となったが、未だ半分のご遺骨が未収容であることも心に留めたい。



終戦80年、戦没者を想う
（公財）千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
会長 鈴木 俊一

全国の会員及び関係諸団体の皆様には、日頃から千鳥ヶ淵戦没者墓苑に眠る



硫黄島戦没者の碑（天山慰霊碑）にご拝礼になる天皇皇后両陛下 4月7日

出典：宮内庁HP
(https://www.kunaicho.go.jp/pagegonittephoto27887)

全国の会員及び関係諸団体の皆様には、日頃から千鳥ヶ淵戦没者墓苑に眠る

先の大戦で海外における戦没者数は約二百四十万人と言われています。そのうち約百二十八万の方々のご遺骨は帰還してまいりましたが、未だ約百二十万人のご遺骨は戦場に残されています。終戦後占領下にあり遺骨の収容ができなかった事情があり、また海没による収容不能や収容させてもらえない国があるといえ、あまりにも多くの方々のご遺骨が戦場に残されています。私は「ご遺骨に対して最大限の敬意をもってお迎えすることが必要である」と考えております。

その第一は、未だに戦場に残されている戦没者のご遺骨の収容であります。先の大戦で海外における戦没者数は約二百四十万人と言われています。そのうち約百二十八万の方々のご遺骨は帰還してまいりましたが、未だ約百二十万人のご遺骨は戦場に残されています。終戦後占領下にあり遺骨の収容ができなかった事情があり、また海没による収容不能や収容させてもらえない国があるといえ、あまりにも多くの方々のご遺骨が戦場に残されています。私は「ご遺骨に対して最大限の敬意をもってお迎えすることが必要である」と考えております。

三十七万余の戦没者に対する心からの慰霊奉賛をいただいており、誠にありがとうございます。今年には終戦80年を迎えました。かの苛烈な戦いにおいて国と家族の安寧を祈りながら戦場に斃られた多くの戦没者を想うとき断腸の思いが致します。今日の我が国の平和と繁栄はこれらの戦没者の尊い犠牲の礎の上にあります。このことは、今を生きる日本人は決して忘れてはならず、戦後生まれの初代の奉仕会会長として、私はこの観点から戦没者慰霊について思うことがあります。

戦で多くの戦没者があつたことも時を経るにしたがいその認識が希薄になってきています。終戦80年の今年には天皇皇后両陛下が4月に硫黄島、6月に沖縄へ慰霊訪問され、また、マスコミも戦後80年特集などを報道し、戦没者慰霊奉賛の機運はより高まってきましたが、これを一過性のものでしないうちに後世にしっかりと受け継いでいかなければならないと思います。関係各位におかれましても、それぞれの立場において啓蒙していただきたいと思っております。

毎年、遺族会・戦友会・慰霊関係諸団体・宗教団体等をはじめ多くの方々の参拝、慰霊祭や供養が実施されており、最近では様々なサークル活動や歩こう会等の増加はみられますが全般的に低調傾向にあります。

このような中、一昨年から本年にかけて3年連続で都内の小学6年生が社会科見学で墓苑を訪れてくれました。その児童たちの大半は墓苑の存在すら知らず初めて来たと感じ文に書いていました。

戦で多くの戦没者があつたことも時を経るにしたがいその認識が希薄になってきています。今年には終戦80年を迎えました。かの苛烈な戦いにおいて国と家族の安寧を祈りながら戦場に斃られた多くの戦没者を想うとき断腸の思いが致します。今日の我が国の平和と繁栄はこれらの戦没者の尊い犠牲の礎の上にあります。このことは、今を生きる日本人は決して忘れてはならず、戦後生まれの初代の奉仕会会長として、私はこの観点から戦没者慰霊について思うことがあります。



この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

民の皆様は戦没者慰霊の輪を広げていた
だけばと念じています。

最後に、皆様とともに戦没者の慰霊
奉賛に更なる貢献をしてみたいと考
えておりますので、今後ともご支援、ご
協力よろしく願います。

戦後80年を迎えて

厚生労働大臣 福岡 資麿



本年は、戦後
80年を迎えます。
先の大戦では、故
郷を思い、また、
愛する家族を案じながら、戦場に斃れ、
あるいは戦後、遠い異郷の地において、
三百万余のかけがえない命が犠牲とな
りました。今日私たちが享受している平
和と繁栄は、こうした戦没者の方々の尊
い犠牲の上に築かれたものであることに
深く思いを致し、謹んで哀悼の誠を捧げ
ます。

また、最愛の肉親を戦争で失った悲し
みの中、幾多の困難に見舞われながら戦
後を生き抜いてこられた御遺族の方々の
ご労苦は、並々ならぬものであったと拝
察いたします。

ここに深く戦没者の方々の御冥福をお
祈りし、御遺族の皆様方に対し、お見
舞い申し上げます。

厚生労働省では、これまで戦没者の
慰霊追悼や御遺族等への援護とともに、
戦没者のご遺骨の収容に取り組みまい
りました。また、DNA鑑定による身
元の特定を進め、できる限り多くのご遺
骨を御遺族の元にお返しつづ、身元の特
定に至らず御遺族の元にお返しできてい
ないご遺骨について、千鳥ヶ淵戦没者墓
苑に三十七万八千柱(令和7年5月末
現在)をお納めしてまいりました。

この墓苑の維持管理などに長らく御
尽力いただいている千鳥ヶ淵戦没者墓苑
奉仕会の皆様は改めて深く敬意を表す
とともに、厚く御礼申し上げます。

また、戦後80年を迎える中で、私とし
ても、厚生労働大臣に就任以来、昨年は
マリアナ諸島で収容されたご遺骨の引渡
式に出席するとともに、本年は、閣僚懇
談会において各府省に対して海外慰霊碑
の訪問を要請しました。そして、私自身
も硫黄島及びペリリュー島を訪問し、慰
霊碑に謹んで献花させていただきました。

硫黄島においては、小笠原兵団長が
戦闘の指揮を執られた壕などに入らせて
いただきましたが、硫黄島の外気温は本
土よりも高い中、壕の中は地熱で更に高
温であり、当時の非常に過酷な環境を
感じました。

ペリリュー島においては、旧日本軍の
戦車が土に深く沈み、錆び付いた姿から、
長い年月を経てもなお当時の激戦の様
子が伺われました。また、集団埋葬地の
現場では、今なお多くの戦没者の方々が
祖国への帰還を待たれていること、照り
つく炎天下、大木の伐採や掘削作業な
ど遺骨収集のご苦勞を強く感じました。

このような苛烈な環境の下で、数多
くの同胞が家族を思い、つつ斃れ、その多
くが未だ帰還を果たされず、これらの地
に眠っていること、戦地で斃れられてま
だご遺骨が帰還を果たされていない御遺
族の思いに触れたとき、可能な限り多く



ペリリュー島・政府建立慰霊碑で
慰霊する福岡厚生労働大臣 5月4日
出典：厚生労働省HP (https://www.mhlw.
go.jp/stf/photo_report/2025/ph0504-01.html)

のご遺骨を一日も早くふるさとお迎え
し、一柱でも多く御家族の方々にお返
しできるよう、引き続き最大限の努力
を重ねていく決意を新たにいたしました。

併せて、戦後80年を迎え、戦中・戦
後の労苦を体験された方が少なくなる
中で、世代を超えて広く国民が戦没者
の記憶を共有・継承し、現在そして未来
に生かしていくため、教育現場などで次
世代への記憶の継承を行う平和の語り部
事業といった取組に尽力してまいります。

終わりに、戦没者の方々に対し、改め
て心から追悼の意を表しますとともに、
御遺族の皆様方のご平安を切にお祈り
いたします。

終戦80年への想い

防衛大臣 中谷 元



戦後80年の節
目を迎えるに当
たり、先の大戦
で亡くなったす
べての人々の命の

前に、深く頭を垂れ、痛惜の念を表す
とともに、謹んで哀悼の誠を捧げます。
国の内外を問わず、国のために尊い命
を犠牲にされた皆様方に対して、哀悼
の誠を捧げ、尊崇の念を表すということ
は、とても大切なことだと考えています。
本年2月、テオドロ国防大臣と会談
するため、フィリピンを訪れました。そ
の際、先の大戦で犠牲になった日本・フ
ィリピン両国の国民の皆さんの墓標の前
で慰霊をしました。

また、フィリピンで亡くなられた日本
兵のために建てられた慰霊碑でもお参り
をしたところ、ちょうど関係者の方もい
らっしゃり、一緒にお参りすることが
できました。
そして3月には、激戦地であった硫黄
島で行われた日米合同の追悼顕彰式に

参加しました。石破総理、米国のヘグセ
ス国防長官とともに、日米双方の全ての
御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げ、御
冥福をお祈り申し上げました。

硫黄島の戦いでは、過酷な状況の中で、
愛する家族と祖国を守るために、国の行
く末、そして家族を案じながら、多くの
兵士が亡くなりました。手を合わせな
がら、こうした出来事を絶対に忘れない
ということ、そして、こうした尊い犠牲
の上に、我が国、そして地域の平和と繁
栄を築いていかなければならないという
ことを強く思いを新たにいたしました。

思い返すと、平成2年の初当選以来、
この世界から戦争をなくすためには何が
できるのかを考えてきました。2001
年に防衛庁長官を務めていた時、9・11
同時多発テロ事件があり、世界は大き
く動きました。2014年に防衛大臣
に就任した際は、戦後の防衛政策を転
換する平和安全法制の成立に尽力しま
した。そして昨年、8年振りに防衛大
臣を拝命しましたが、今、我が国を取
り巻く安全保障環境は、戦後最も厳し
く複雑なものとなっております。

終戦80年に想う

前経済再生担当大臣
衆議院議員 新藤 義孝



本年8月15
日で終戦から80
年となります。
先の大戦では、
三百万余の同胞

のかけがえない命が失われました。
祖国の行く末を案じ、家族の幸せを
願いながら、戦場に斃れた方々。広島や
長崎での原爆投下、各都市での爆撃、
沖縄での地上戦などにより命を落とされ
た方々。戦後の抑留などにより遠い異郷
の地で亡くなられた方々。戦争により将
来を絶たれた全ての戦没者の方々の御霊
に改めて哀悼の誠を捧げます。

また、ご遺族の方々には、最愛の肉親
を戦争で失った悲しみに耐え、戦後の混
乱と困窮の中を生き抜くために、言葉
に尽くせないご労苦があったものと承知
しております。
千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、無名戦没者
の墓として昭和34年に国により創建さ
れました。戦場で亡くなられた二百四十

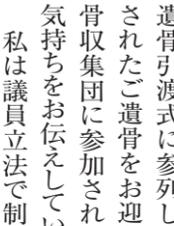
厳しい安全保障環境だからこそ、我
が国は、いかなる紛争も、法の支配を尊
重し、力の行使ではなく、平和的・外交
的に解決すべきとの原則を、これからも
堅く守り、世界の国々にも働きかけてい
かなければなりません。

外交力と防衛力は車の両輪です。現
在、我が国は防衛力の抜本的強化を進め
ているところですが、戦争を起こさせな
い抑止力としての防衛力の構築や、同盟
国や同志国との連携の強化に、これから
も全力で取り組んでいきたいと思いを
最後にありますが、千鳥ヶ淵戦没者墓
苑奉仕会の皆様の日々の活動に心からの
敬意を表し、結びとさせていただきます。

秋期慰霊祭の開催を含め、この墓苑
の維持管理を長年にわたり献身的に担
つてこられた鈴木俊一会長はじめ「千鳥
ヶ淵戦没者墓苑奉仕会」の献身的な活
動に心より感謝申し上げます。
私も硫黄島戦没者遺族の一員として
遺骨引渡式に参列し、硫黄島から帰還
されたご遺骨をお迎えすると共に、遺
骨収集団に参加された皆さまに御礼の
気持ちをお伝えいたします。

終戦80年への想い

防衛大臣 中谷 元



戦後80年の節
目を迎えるに当
たり、先の大戦
で亡くなったす
べての人々の命の

前に、深く頭を垂れ、痛惜の念を表す
とともに、謹んで哀悼の誠を捧げます。
国の内外を問わず、国のために尊い命
を犠牲にされた皆様方に対して、哀悼
の誠を捧げ、尊崇の念を表すということ
は、とても大切なことだと考えています。
本年2月、テオドロ国防大臣と会談
するため、フィリピンを訪れました。そ
の際、先の大戦で犠牲になった日本・フ
ィリピン両国の国民の皆さんの墓標の前
で慰霊をしました。

また、フィリピンで亡くなられた日本
兵のために建てられた慰霊碑でもお参り
をしたところ、ちょうど関係者の方もい
らっしゃり、一緒にお参りすることが
できました。
そして3月には、激戦地であった硫黄
島で行われた日米合同の追悼顕彰式に

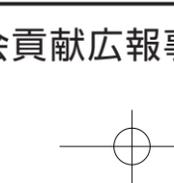
万人余の方よりこれまでに収容された百
二十八万余のご遺骨のうち、本人の特
定ができない約三十七万柱のご遺骨が安
置されています。

墓苑近くの九段には英霊を祀る靖國
神社があり、日本武道館では毎年8月
15日に政府主催の全国戦没者追悼式が
行われます。千鳥ヶ淵戦没者墓苑にお
いても、新たなご遺骨を納骨する拜礼式、
戦域各地で収容されたご遺骨の厚生労
働省への引渡式、そして各団体によるも
のを含め、一年を通じて多くの慰霊行
事が行われ、国民的な慰霊追悼の場と
なっています。

秋期慰霊祭の開催を含め、この墓苑
の維持管理を長年にわたり献身的に担
つてこられた鈴木俊一会長はじめ「千鳥
ヶ淵戦没者墓苑奉仕会」の献身的な活
動に心より感謝申し上げます。
私も硫黄島戦没者遺族の一員として
遺骨引渡式に参列し、硫黄島から帰還
されたご遺骨をお迎えすると共に、遺
骨収集団に参加された皆さまに御礼の
気持ちをお伝えいたします。

終戦80年への想い

防衛大臣 中谷 元



戦後80年の節
目を迎えるに当
たり、先の大戦
で亡くなったす
べての人々の命の

前に、深く頭を垂れ、痛惜の念を表す
とともに、謹んで哀悼の誠を捧げます。
国の内外を問わず、国のために尊い命
を犠牲にされた皆様方に対して、哀悼
の誠を捧げ、尊崇の念を表すということ
は、とても大切なことだと考えています。
本年2月、テオドロ国防大臣と会談
するため、フィリピンを訪れました。そ
の際、先の大戦で犠牲になった日本・フ
ィリピン両国の国民の皆さんの墓標の前
で慰霊をしました。

また、フィリピンで亡くなられた日本
兵のために建てられた慰霊碑でもお参り
をしたところ、ちょうど関係者の方もい
らっしゃり、一緒にお参りすることが
できました。
そして3月には、激戦地であった硫黄
島で行われた日米合同の追悼顕彰式に

この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



硫黄島・播鉢山で説明を受ける総理一行
3月29日

出典：首相官邸HP (https://www.kantei.go.jp/jp/103/actions/202503/29ioutou.html)

（第二面からつづく）
帰還事業を促進していきます。
さらに本年4月には、自民党有志議員による「平和を願い戦没者を慰霊顕彰する国会議員の会」を設立いたしました。千鳥ヶ淵戦没者墓苑や靖国神社、全国の護国神社、さらにはパラオ・ペリリュー島やミャンマーなど国内外の追悼施設や激戦地を訪れ、平和を願い英霊を追悼顕彰する取り組みを進めてまいります。
戦後80年が過ぎ、時代や社会は大きく変化しておりますが、どれほどの時間が経ち世代が移っても、私たちは現在の平和が英霊の皆さまの尊い犠牲の上に成り立っていることを心に刻み、決して風化させることなく次の世代に伝えていかなくてはなりません。
千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、樹木が茂る静寂の中で、戦没者を想い、感謝の念を捧げることが出来る国の施設です。
かつて、国のため、家族や大切なものを守るために精一杯働いた人々の想いを継承し、この国の未来のために活かしていくための場として、広く国民の理解を深め、さらにたくさんの方々を訪れる墓苑として存在し続けていくことを願っております。
いま一度、戦没者の御霊安らかならんことを祈念し、ご遺族の皆さまに限りなくご加護を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

終戦80年、慰霊の言葉

前参議院議員 佐藤 正久



この数年の夏は記録的な猛暑が続いています。その様な中でも千鳥ヶ淵戦没者墓苑の環境整備と戦没者の慰霊に尽力されている会員の皆様、心からの感謝を申し上げます。

今年終戦から80年の節目の年ですが、今もなお112万余柱（令和6年度末現在）のご遺骨が未収集のまま、異国の地や海の中に眠っておられます。私は福島県福島市の出身ですが、その周囲を見回すと旧陸軍の第2師団（司令部：仙台）隷下にあった歩兵第29連隊（駐屯地：会津若松）が、昭和17年8月から始まったガダルカナル島争奪戦に投入されて多数の戦死者・戦病死者を出して壊滅しており、多数の御柱が鬱蒼としたジャングルの中で眠られたままとなっております。

故郷に戻れなかつた戦没者ご自身ももとより、ご遺骨をお墓に納められなかつたご遺族の方々の無念さを思うと胸が詰まります。

その様な中、昨年12月にはペリリュー島で発見された日本軍将兵の集団埋葬地の発掘調査が行われ、また、本年4月には天皇后陛下が硫黄島をご訪問されたことが世間の耳目を集めたことは一筋の光明です。

これらの出来事と終戦80年の節目を機に、遺骨収集の機運がさらに高まることを期待しております。

また、陸上だけでなく、海中に眠るご遺骨の収集も急がなければなりません。昭和19年2月に米海軍機動部隊の大空襲を受けたチューク諸島（旧名：トラックス諸島）の沈没艦船内のご遺骨です。

「沈没艦船は『海の墓標』であり、中のご遺骨はそのまま安置する」というのが船乗りのしきたりですが、観光地化したチューク諸島では沈没艦船内のご遺骨は言わば見世物となり、一部の心無いダイバーによって撮影されSNS上にさらされるなど興味本位な扱いをされるケースが長年にわたって問題となっており、この様な状況に対し、一刻も早くご遺骨を収集しご遺族のもとへ送り届け、戦没者の御霊には安らかに眠りいただきたいというの、人間であれば当然に抱く感情でしょう。

しかしながら、遺骨収集には各国の政治的・法的な壁があり、何より80年以上という時間経過の壁が大きく立ち、はたかつており、容易ならざる状況です。これらの壁を乗り越えるためにも、厚生労働省、外務省、そして防衛省と連携し、遺骨収集の促進に尽力することをお誓い申し上げます。また、戦没者の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げます。慰霊の言葉とさせていただきます。

戦争の記憶を伝承する「平和の語り部」として
一般財団法人日本遺族会
会長 水落 敏栄

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の皆様には、ご創建から今日まで、戦没者の慰霊に心を砕いてくださっておりますことに、戦没者遺族を代表し、衷心より感謝申し上げます。

本会は、「二度と戦没者遺族を出さない」という固い決意のもと、昭和22年に結成以来、77年余の長きにわたり活動を続けています。活動の根幹は、「英霊の顕彰」

であり、「戦没者を忘れないこと」、つまり「平和の語り部」であります。

遺族会の語り部は、戦後50年頃、地域の要請によって始まり、好評を得て草の根的に広がりました。活動の中核を担った遺児の高齢化に伴い、永続的に実施するため、令和5年度より次世代青年部（戦没者の孫、ひ孫、甥、姪等）と共に全国で実施する事業として組織決定しました。

他方、国も戦争の風化に鑑み、令和6年度新規補助事業「平和の語り部事業」を新設し、本会が応募し、採択されました。

戦没者遺族の記憶は二度と戦争の惨禍を繰り返さないための貴重な教訓であるとの考えのもと、戦争体験者の記憶と、地域の戦争の歴史をお話すること、ありふれた日常が戦争によって奪われた話をお伝えします。そして、講話型・対話型・体験型など多様な形態を用いて体験者と戦後生まれの青年部が共に活動し、後世代へ戦争と平和について考える機会を提供しています。

本事業の周知を目指し、本年3月より月一回定期講話会を開催しています。体験型として、旧戦域における氏名不詳で引き取り手のない戦没者のご遺骨を納める千鳥ヶ淵戦没者墓苑のいわれを学び、清掃体験をする企画を実施し、高い評価を得ました。奉仕会の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

終戦から80年が経過し、国民の九割が戦後生まれとなり、戦争の記憶は風化する一方、世界では争いが絶えず悲しみは繰り返されています。平和な社会を維持するために必要なことは、今日の我が国の平和と繁栄に、甚大な犠牲があつたことを忘れず、「戦争は絶対にやめてほしい」と多くの人が胸に刻むことだと考えています。それはつまり、今後千鳥ヶ淵戦没者墓苑に幅広い世代の方々を訪れることを意味し、そのた

めに本会は、体験者、次世代の語り部を育成し、全国で語り部事業を展開してまいります。

どうぞ、貴奉仕会の皆様におかれましては、今後ともお力添え賜りますよう祈念申し上げます。御礼のご挨拶といたします。

戦後の節目に「平和の社」で思うこと
靖国神社 宮司 大塚 海夫

80年間、国内外の戦争と無縁で平和を享受できた国は、世界でも十指に届きません。今日、ウクライナ、イスラエルなど、国外、国内の武力紛争を抱える国は枚挙に暇がなく、国境を越えて、或いは、国内で一触即発の国も数えればきりがなく、日本は世界でも稀に見る、比類なき平和国家なのです。

近代日本の国難に殉じた英霊を奉慰顕彰する靖国神社にとって、終戦80年とは、これまで神社をお支え下さった戦没者遺族の最も若い方が80歳を迎える年であり、御祭神を直接ご存知ない方々が参拝者の圧倒的多数を占めるという観点から大きな節目となる年です。戦友や御遺族による参拝は、特定の御祭神への思慕に基づくものである一方、御祭神をご存知ない方々の参拝は、国のために殉じた英霊を奉慰顕彰することが後世の者の大切な役割である、という理解に立ってのものでしょう。神社には、これまで以上に英霊祭祀の意義を参拝者にお知らせする努力が求められることとなります。

戦争の記憶が時と共に薄れていくことは必定です。80年間、およそ三世代にわたり平和が続いた日本では、多くの国民にとって戦争自体が発想の枠外の出来事であり、あたかも平和が与件であるかの如く思っても不思議ではありません。

しかし、平和はいつもそこにあるのではなく、時間とお金と、そしてときには命を懸けて創り出すものというのが世界の現状なのです。

現代欧州の知性と呼ばれるジャック・アタリは、これからの時代は利他主義に基づく社会が求められると言い、日本こそがその手本だと語っています。日本人は自然体で「和」を語る民族です。世界が不安定な度を増す中で、国際社会が共存共栄していくために、「和」の精神に基づく包摂性を持つ日本人が世界平和に寄与できる余地は大きいと思います。

英霊の遺書からは、次の世代が平和に暮らせることを願って散華された方々の多いことに気付かれます。その平和を享受している我々の責務は、英霊への感謝とともに、更に次の世代に平和をバトンをタツチしていくことです。靖国神社は、過去と現在が途切れることのないよう、英霊の奉慰顕彰に尽くしてきました。

英霊祭祀を通して、靖国神社が将来の平和を考える場としての役割をも果たし、過去から現在、更に未来へのベクトルを描いていくことがこれからの課題であると思っております。

国民の平和観、戦争観は、直近の戦争の記憶から生まれると言われます。我々に求められるのは、80年前の大東亜戦争で命と引き換えに後世に平和を残した英霊の想いと向き合うことで、現在の平和を次の世代へ継承するにはどうすればよいか知恵を絞ることでありましょう。

（第四面につづく）



千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の皆様には、ご創建から今日まで、戦没者の慰霊に心を砕いてくださっておりますことに、戦没者遺族を代表し、衷心より感謝申し上げます。

本会は、「二度と戦没者遺族を出さない」という固い決意のもと、昭和22年に結成以来、77年余の長きにわたり活動を続けています。活動の根幹は、「英霊の顕彰」

であり、「戦没者を忘れないこと」、つまり「平和の語り部」であります。



靖国神社 宮司 大塚 海夫

80年間、国内外の戦争と無縁で平和を享受できた国は、世界でも十指に届きません。今日、ウクライナ、イスラエルなど、国外、国内の武力紛争を抱える国は枚挙に暇がなく、国境を越えて、或いは、国内で一触即発の国も数えればきりがなく、日本は世界でも稀に見る、比類なき平和国家なのです。

近代日本の国難に殉じた英霊を奉慰顕彰する靖国神社にとって、終戦80年とは、これまで神社をお支え下さった戦没者遺族の最も若い方が80歳を迎える年であり、御祭神を直接ご存知ない方々が参拝者の圧倒的多数を占めるという観点から大きな節目となる年です。戦友や御遺族による参拝は、特定の御祭神への思慕に基づくものである一方、御祭神をご存知ない方々の参拝は、国のために殉じた英霊を奉慰顕彰することが後世の者の大切な役割である、という理解に立ってのものでしょう。神社には、これまで以上に英霊祭祀の意義を参拝者にお知らせする努力が求められることとなります。

戦争の記憶が時と共に薄れていくことは必定です。80年間、およそ三世代にわたり平和が続いた日本では、多くの国民にとって戦争自体が発想の枠外の出来事であり、あたかも平和が与件であるかの如く思っても不思議ではありません。

しかし、平和はいつもそこにあるのではなく、時間とお金と、そしてときには命を懸けて創り出すものというのが世界の現状なのです。

現代欧州の知性と呼ばれるジャック・アタリは、これからの時代は利他主義に基づく社会が求められると言い、日本こそがその手本だと語っています。日本人は自然体で「和」を語る民族です。世界が不安定な度を増す中で、国際社会が共存共栄していくために、「和」の精神に基づく包摂性を持つ日本人が世界平和に寄与できる余地は大きいと思います。

英霊の遺書からは、次の世代が平和に暮らせることを願って散華された方々の多いことに気付かれます。その平和を享受している我々の責務は、英霊への感謝とともに、更に次の世代に平和をバトンをタツチしていくことです。靖国神社は、過去と現在が途切れることのないよう、英霊の奉慰顕彰に尽くしてきました。

英霊祭祀を通して、靖国神社が将来の平和を考える場としての役割をも果たし、過去から現在、更に未来へのベクトルを描いていくことがこれからの課題であると思っております。

国民の平和観、戦争観は、直近の戦争の記憶から生まれると言われます。我々に求められるのは、80年前の大東亜戦争で命と引き換えに後世に平和を残した英霊の想いと向き合うことで、現在の平和を次の世代へ継承するにはどうすればよいか知恵を絞ることでありましょう。

（第四面につづく）



靖国神社拝殿

この刊行物は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

靖國神社は、「平和国家日本を次世代に継承する」という縦軸と、「国際社会に誇れる我が国の平和観を世界に伝える」という横軸の中心にある「平和の社」としての役割を果たしていく所存です。「無名戦没者の墓」として慰霊追悼の聖苑を護る千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会とも手を携えて、平和の為に尽くして参りたく思います。

終戦80年に想う

(公社) 隊友会 会長 折木 良一



今年には終戦80年の節目を迎えます。

この80年の平和を振り返ると、戦争を経験し家族、友人、戦友等を亡くした世代が戦後復興の原動力となり、残された方々によって慰霊顕彰の礎を築いてくれました。そして、今や戦後生まれの人口が9割を占めるようになり、その担い手の役割を根本的に見つめなおす時期にきているように感じます。

これまで千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の皆様は、昭和34年の墓苑設立以来、永年にわたり慰霊顕彰のご奉仕を続けてこられましたことに深甚の敬意と謝意を表す次第です。

隊友会は、昭和34年に43の退職者団体が母体となり全国組織が結成されました。その趣旨書には「われわれは、かつて祖国防衛の情熱にもえ、同志相よって隊務に精励した心情を結実し、会員相互の親睦をはかると共に、自衛隊のよき理解者として、国民と自衛隊とのかけ橋としての役割を果たす」とあり、これが(公社) 隊友会の目的である「国民と自衛隊とのかけ橋として、相互の理解を深

めるとともに、防衛意識の普及高揚に努め、国の防衛及び防災施策、慰霊顕彰事業並びに地域社会の健全な発展に貢献することにより、我が国の平和と安全に寄与し、併せて自衛隊退職者等の福祉を増進すること」に受け継がれています。

現役時代、「事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め、もって国民の負託にこたえる」ことを誓っていた私たちは、祖国の為、家族の為、日本の将来の為に戦い、尊い命を捧げられた方々のご冥福を祈り、毎年、千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭への協力をそれぞれの陸軍近衛連隊隊友会等有志の方々から東京都隊友会が引継ぎ平成11年から行っています。また、中央又は各地において実施される戦没者等の慰霊顕彰行事にも参加・協力するとともに、全国各地に所在する陸・海軍墓地等の清掃維持管理等の支援を関連団体等と共に行っています。

戦没者の遺骨収集事業においては、平成23年11月から(公財) 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の構成団体として硫黄島の戦没者収集事業に参加していたところ、令和元年度からは(一社) 日本戦没者遺骨収集推進協会の社員団体として、硫黄島のみならず南方の東部ニューギニアやビスマーク・ソロモン諸島方面の戦没者遺骨収集事業にも会員を派遣する等により参画しています。

特に、南方の東部ニューギニアやビスマーク・ソロモン諸島の戦没者遺骨収集に係る現地調査派遣では、道なき道の熱帯雨林のジャングル、崖や急流の渡河等、厳しい環境の中、熱中症はもとより、マラリアやサンドフライ対策が求められ、更に毎派遣期間中の数日間露営を強いられるという過酷な状況での活動を通して、この地域で戦った日本兵の苦勞の一端を体験することで思い知らされる気がしています。

終戦から80年。この東部ニューギニア

及びビスマーク・ソロモン諸島方面には、未収容のご遺骨数が約13万4千柱、硫黄島には、約1万1千柱と聞きます。ご遺族(遺児) がご高齢になられていることを思うとき、(公社) 隊友会として、微力ながら「一柱でも多く、一日でも早いご帰還」に、お手伝いをするのと同時に、千鳥ヶ淵戦没者墓苑への協力・活動を通して絆の輪が広がることが出来ればとの思いを新たにしています。おわりに、千鳥ヶ淵戦没者墓苑がこれからも何時でもお参りができる墓苑として末永く続きますよう、祈念いたします。

みなさまのことを忘れません (全戦没者への感謝を込めて)

JYMA 日本青年遺骨収集団 理事長 反町 佳生



大東亜戦終結後、冷戦やテラント、ソ連崩壊などを経つた80歳を閲し、現在我が国を取り巻く国際情勢は日々厳しさを増しています。

事実、ロシアによるウクライナ侵略をはじめ、中国の無法な海洋進出・台湾侵攻への蠢動は強度を高め、北朝鮮による核開発やミサイル技術の向上など、我が国の安心安全を脅かす動きには枚挙にいとまがありません。

その一方、国内政治に目を向ければ、「政治とカネ」の問題にほぼすべての議論が収斂され、我が国領土をいかに防衛し、国民生活の安寧を図るかという肝腎かなめの問題が棄却されてしまっているのが否めません。国土国民があつてこそ自由と民主主義でありますが甚だ心もとない限りです。

我が国が防衛力を高めることイコール戦争をする国家への変貌、という世迷言

にまだまだ執着している勢力も多く、由々しい事態であると言えましよう。戦争は我が国我が国民がそれを決して望まなかつとも、仕掛けられてしまうことは昨今の国際情勢を見ても明白です。その現実にかつて目を瞑り、話し合えばよい、平和憲法さえあればすべて事足りりとする一部思想は夢物語であるとしか言いがありません。

80年前の戦争では310万人を超え日本の老若男女が尊い命を落とし、さらに多くの国民が財産を失い、肉親・知己を亡くされました。同様に、アメリカをはじめとした交戦各国にも多大の犠牲がありました。世界史上きわめて悲しく、不幸な出来事でありました。

我が国はその後、辛酸をなめつつも、戦後80年の長きにわたり一発の銃弾も放つことなく国を發展させ、世界に冠たる平和国家を作り上げてまいりました。これは偏に、先の大東亜戦争でお亡くなりになった方々の尊い犠牲があつたからこそであり、ここ千鳥ヶ淵にお眠りになるみなさまをはじめ、すべての戦没者の御霊に心からの感謝を申し上げる次第です。

私共 JYMA 日本青年遺骨収集団は、昭和42年の創設以来「慰霊と伝承」を理念に掲げ、戦地に残されたままの戦没者の御遺骨を祖国にお迎えする事業、慰霊・顕彰を続けてまいりました。現在は、日本戦没者遺骨収集推進協会が実施する国内外への派遣事業に積極的に参加するとともに、沖縄での自主派遣活動も毎年継続実施しております。

ホロコーストの生還者でノーベル平和賞受賞作家のエリ・ヴィーゼルは、自伝的小説の「夜」の中で「死者を忘れることは、その人を二度殺すことになる」と述べました。

私共は日本の青年団体として、昭和、平成、令和へと時代が移ろつても、我が国の未来の礎としてただひとつの命を捧げてくださった方々を忘れることなく、

慰霊と感謝の灯火を継承してまいります。さらに、かつて戦域となつた諸国との国際親善を図り、遺骨収容並びに慰霊顕彰を確固たるものにするため、引き続き千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会さまをはじめ、関係する諸団体のみなさまからのご指導ご鞭撻を賜りながら、活動の幅を広げてまいりたく存じます。どうぞよろしくお願いいたします。



墓苑のハスの花

懸賞小論文

【最優秀賞】 戦没者慰霊の在り方(慰霊の継承) 一般社団法人災害防止研究所 代表理事 69歳 吉田 明生

「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」は、先の大戦において海外で亡くなったすべての戦没者のご遺骨を祀る「墓地」である。「無名戦士の墓」とはしなかつた。「戦士」とすると軍人に限られてしまふ軍属・一般邦人といった人々を包括しにくいことが理由だった。

現在、370、467柱(令和5年10月4日現在)のご遺骨がこの墓苑に奉安されている。

単なる「墓地」であれば、一般的には、一周忌、三年忌、七年忌などの年忌供養や命日ごとの供養、それに毎年の盆供養や彼岸行事などで子孫のまつりをうけることによって鎮められ清められていく。日本人の先祖祭祀の考え方に従え

ば、弔い上げの三十三年忌や五十年忌までは死者として祀り、それ以降、死者の霊魂は個性を失って先祖群へ融合し、神となる、という考え方になるだろう。

しかし国家として多くの「戦士」を含む戦没者の慰霊になると、そうはいかない。年忌をあけて神様と同列の存在になつてしまつたからお終いになるわけではないし、念仏を唱えるように平和を祈念し、誓うというだけでも足りない。

国民軍を常備する近代国民国家にとつて、戦争に自らの生命を捧げる「戦士」の存在は不可欠なもので、国際法では「戦士」の役割と一般市民の存在とを厳然と区別している。

国のために命を捧げることを誓約し、命をかけて国家に奉仕した者を称揚して名誉を与え、その家族ともども養つていく現実的な保障がなくては国の存在が危うくなつてしまう。

アメリカではアーリントン国立墓地に無名戦士の墓があり、イギリスではウエストミンスター寺院境内に無名戦士の墓がある。いずれの無名戦士の墓も、戦場から誰とも特定できない数体の遺体の中から一遺体だけが選ばれ、その戦争におけるすべての無名戦士を代表するものとして埋葬されているという。名前が分からないからと言って、どこの国も決して、国に忠誠を尽くした「戦士」を等閑にすることはない。

死者の霊を慰めその御霊の安らかな落ち着きを願うための儀礼的行為として感謝し敬うことはもちろんだが、それ以上に国家として感謝を表し、自己犠牲の精神や国家に対する忠誠心を称揚することが必要になる。

「戦士」は、国家が追求する平和を築くために働き、血を流す。軍事力が問題を解決するのではないが安定を築くために決定的な役割を果たしてきた。それが戦争で、その役割を担うのが「戦士」だ。彼らは「心ならずも」散華したので

(第五面につづく)

(第四面からつづく)

はない。彼らの使命感を軽んじてはいけ
ない。自らの役割を深く認識して任務に
邁進した。だからこそ、尊いのだ。

慰霊には、二つの意味がある。

一つは、世界中の万人に普遍的な、世
界平和と安定と発展を守っていくという
理想への誓いの慰霊である。和を尊ぶ日
本人の価値観や先の大戦の戦禍を鑑み
ると、世界平和を祈るのは極めて自然な
発想であるし、戦没者として軍人・軍属
・一般人を包括し慰霊するのは、一国
万民の思想からすべての国民を御寶とし
て等しく扱うことにも通じる。

もう一つは、近代国家として国民一
人ひとり自らが平和のために戦う覚悟
を誓う慰霊だ。誰しも平和を願うのだが、
どうしようもないこともある。人間には
戦つても守つていかなければならない
価値がある。そのときに何ができるか。
そのために何ができるか。

「戦士」を慰霊する心は、不動明王の姿
に似ている。不動明王は右手には諸刃の宝
剣を握り、左手に絹索を持ち、背にメラ
メラと燃え盛る火焰を背負い、瞳孔を見
開いて忿怒の形相を見せているが、決して
戦おうとしているのではない。我が身を捨
て、血がにじむほど歯を食いしばり下唇
を噛みしめ、必死の形相で己を抑えつづ
くかを救おうとしている姿なのだという。
厳しい現実の世界に生きる者の誓いの
慰霊である。

理想と現実の慰霊、両者相俟って、人
の真の姿を現すものになる。一つのいざれ
かが欠けても聞く人に不安を抱かせてし
まい、広がりのある共感を呼ぶことはない。
慰霊は、過去の人のものではない。今
を生きる人々を未来に繋ぐものでなけれ
ばならない。この二つの意味を言葉に表
して慰霊し、覚悟を受け継いでいくこと
が「戦没者」が未来へ託していった「か
げがえのない日本」という財産を受け継
ぐことになるのだと思う。



上皇陛下御製碑
戦なき世を
歩みまて
思い出づ
かの難き日と
生きし人々

【優秀賞】
若い世代へ周知のアイデアと祈る心

社員 織茂 麻子

今年1月3日、東京に住む社会人3
年目の息子と共に国立千鳥ヶ淵戦没者
墓苑に参りました。私も息子も初めて
参りまして、菊の花を献花いたしました。
ほんの20分前の靖国神社には多くの人々
がいましたが、こちらの墓苑の六角堂に
は私と息子だけ。

息子が言いました、「靖国神社は人で
賑わっているが、俺は、ここ国立千鳥ヶ
淵戦没者墓苑は静寂があり好きだな。
こうやってお正月に菊の花を献花でき
よかった」と。私、「若い世代に、この
国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑を知ってもら
うために、どのようにしたらよいと思う？」
息子、「中学の修学旅行が東京だった
けど、武道館に寄る学校もある。その
武道館の隣がこの墓苑だから、ぜひ寄
るといいよね。俺、中学生の時にここに
来たかったよ！ 早く知りたかった」。

息子は岩手県盛岡市で育ちました。
東京の修学旅行でこの国立千鳥ヶ淵戦
没者墓苑へ寄り、そして、生徒一人一人
菊の花を献花し手を合わせる。これは英
霊の皆様も心からお喜びになるのではな
いか、そして生徒の皆さんに敬礼し感謝
しているのではないかと。息子の考えは良
いアイデアだと感じました。

また、私は岩手県の小学校、中学校
で勤めた経験があります。学校には、
遠くの都道府県から「修学旅行でぜひ
いらしてください」と様々な施設等から
手紙が届きました。必ず職員室で回覧

し検討することから、学校へ国立千鳥ヶ
淵戦没者墓苑のパネルやチラシを
送付することも、若い世代に伝えていく
力があり、グッドアイデアだと思います。
若い頃から知ることにより、「祈る心」
が育ちます。国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑
に修学旅行で行き、こんなにも多くの英
霊が眠っていることを知り、手を合わせ
祈る。この体験は、かけがえのないもの
です。遠く離れた地元に戻った後も心に
必ず残ります。そして遠くからでも手
を合わせ祈る心が育つ。私はこの祈る心
が今を、そして未来を生き抜くパワーに
なると確信しています。

小中学校への出前講座をすることもグッ
ドアイデアです。もちろん高校でもよいで
す。学校では生涯学習の一貫として、出
前講座を年に数回取り入れていきます。そ
の学校で、国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑につ
いて、話をさせていただくのです。大変意義
があり大きな力があるでしょう。出前講
座のよき影響力を私自身体験しています。

私は、子供が小中学校の頃、PTA
の役員となり出前講座を担当しました。
とあるセンターの方をお招きし出前講座
をしたのですが、保護者の方から「こ
んな素晴らしいところがあるとは。この
ような活動しているとは知らなかった。
知れてよかったです。近いうち必ず家族で行
つてみます」などの感想をいただきました。

公民館などの講座ですと興味ある人
しか申込をしません、学校の出前講
座ですと興味ない人も聞くことになりま
す。しかし、それが素晴らしいことで、
それがきっかけでスイッチが入る人も多
いのです。出前講座の力です。小中学校
の児童生徒だけに向けての出前講座も
ありますが、保護者や教職員の方々も

児童生徒と一緒に聞けるようにする。
このスタイルの出前講座が広く巻き込む
のでおすすめです。
今年1月3日、息子と共に国立千鳥
ヶ淵戦没者墓苑に参ることができ本当に

よかった、と約1ヶ月経った今でも心か
ら思っています。日本人として多くの方々
に来て欲しい、手を合わせて欲しい場所
です。若い世代に国立千鳥ヶ淵戦没者墓
苑が周知され、祈る心を大切に生きる
若者が増えること、これは英霊の皆様も
願っていることではないかと感じています。
戦前の日本人は、「お天道様が見てい
る。お天道様に恥じないよう生きる」が
身に付く教育があったと聞いています。
大正初期生まれの祖母も「誰が見てなく
てもお天道様が見ているよ。祈ることは
日本人である誇り」と申していました。私
自身、毎朝朝棚に手を合わせていますが、
国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑から遠く離れ
たところに住んでいても英霊の皆様へ手
を合わせることに、祈る心を今後も大切
して生きていきたいと考えています。



昭和天皇御製碑
いのちをさげし
ひとりの
こととおもへば
むねせまり
くる

【優秀賞】
戦後80年そして昭和100年の
節目の年に

主婦 澤井 園子

私が幼い頃から繰り返し聞いた、母の
叔父への思い。
母はある日、大好きな叔父さんの膝の
上で「おはぎ」を食べた。優しい叔父さ
んは「全部食べていいよ」と言ってくれた。
幼い母には出兵を控えた叔父のために特
別に作られた物とは分からなかった。
その後、叔父さんは母におはぎの思い出
を残したまま、ビルマで戦病死した。母
は私に、あの時「大好き」「ありがと」「
帰って来てね」と伝えられていたらと
言っていた。

現在、私は母の思いを受け継いで、ビ
ルマで戦病死した叔父の慰霊のために、
戦友会と遺族会において活動をしている。
これまでの英霊の慰霊は、戦友会や遺
族会を中心に行われて来た。戦友会の
目的は、亡くなった戦友を慰霊すると共
に、生死の境を共にして生き残った戦友
との親交を深めることだった。また、遺
族会は遺族という定義の中にある者が
団結して、国に補償を求める会であつた。
長い間それぞれは活動してきたが、
その間、戦友や遺族ではない者について
は会への入会を認めなかった。そこには
その後の会の「継承」と言う考えがなく、
自身の子供でさえ会を継承していこうと
いう者が現れない状態を自分達で作って
しまったのである。

限定された会員のみで運営されてきた
これらの会は、時の流れと共に会員が減
少し、活動が継続できない状況となる寸
前になり、「継承」について慌てて考え
るようになったように感じる。
私が戦友会や遺族会に入ることがで
きたのは、ちょうど「継承」について考
える時期に差し掛かっていたためである。
ただ孫世代の私のような参加者は稀で
ある。子孫は末広がりに増えていくもの
であるが、子孫と面識のない戦没者は、
いつの間にか「先祖代々」で一括りとな
り、埋もれていく。当然と言えば当然の
ことである。その中の戦没者だけを特
別に慰霊すると言うのは、一般的には
難しいことなのかもしれない。

ただ戦没者の慰霊は、戦友会や遺族
会の関係者だけに限る必要はない。どこ
の家庭でも週れば一人くらいは戦没者に
行き着く。その気持ちさえあれば、何
らかの会に入らずともいつでもどこでも
誰でも出来る。そしてこれからの世界と
日本の平和への願いとして、もっと広く
日本全体で継承していかなければならな
い大事なことである。

戦没者の慰霊が未永く続いていくよ
うにするためには、まずは戦争で国のた
めに戦つて亡くなった方々がいたとい
うことに触れる機会、またはそれに気付
ける機会を様々な形で増やしていきたい。
慰霊の気持ち芽生えさせるきっかけ作りが大事
ではないかと思う。その一つとして「語
り部」なども有効な手段と言えらるだろう。
日本遺族会では現在、組織継承を考
えている。「平和の語り部事業」に力を入
れている。傘下の各都道府県の遺族会では、
遺児世代と私のような孫世代を中心と
した青年部とが協力して、地域に根付
いた語り部活動が実現できるように努
力している。

たまたま叔父の慰霊を目的に参加し
た遺族会。遺族の方から聞くお話は私
にとつて知らないことばかりで学びの場
となつた。私はいつしか集まりに参加す
る度に自分から声を掛けてお話を聞く
ようになっていった。そしてそれはとて
も恵まれた環境なのだと気付く。自分
に何かできないかと考えていた時、語り
部事業に携わることとなつたのである。
当初は聞いた話を一旦、私の中で
受け止めて、それをどのようにしたら
良いのだろうかと思いつきふんと考えた。
たくさん増えていく証言が私の頭の中
で溢れていく。

ある時、受け止める必要はないのでは
ないかと思つた。語り部は偉い人でも何
でもなく、更にそれに対しての私の思い
や、個人の思想等を加える必要はないの
ではないかとも思えるようになった。格
好よくまとめる必要はない、それにつ
いてどう思つたかを伝えるのではなく、ご
老人方から聞いたありのままを、その話
はどんなだったか、どのように話された
のかなどを私達を通じて伝えていけば良
いのではないかと。たくさんのお話を受
け継ぐが、それを受け止めて終わ
つてはいけない。それをまた次の世代へ
と繋いでいくのが私達の役目なのである。
戦友や遺族という定義の人達はいつか
(第六面につづく)

